

Y11b 「一家に1枚 天体望遠鏡の400年」 ポスターの制作

臼田-佐藤 功美子、縣 秀彦、青木 和光、臼田 知史、林 左絵子、竹本 理絵（国立天文台）、半田 利弘（東京大）、高橋 淳（茨城県立水海道第一高）、篠原 秀雄（埼玉県立蕨高）、塚田 健（姫路市星の子館）、井上 毅（明石市立天文科学館）、阪本 成一（JAXA）、長田 哲也（京都大）、洞口 俊博（理工学研究部・国立科学博物館）、日本天文学会・天文教材委員会、アストローツ

2009年はイタリアの科学者、ガリレオ・ガリレイが初めて望遠鏡を使って天体観測を行ってから400周年にあたり、「世界天文年」に指定されている。今年4月、文部科学省・科学技術週間で配布される「一家に1枚」ポスターで、ガリレオ望遠鏡から現在までの天体望遠鏡の歴史を紹介することが採択された。

ポスターとして見栄えがする（＝詳細になりすぎない）こと、家庭や科学館で話がふくらむような内容にすることに留意しながら、以下の2点を強調して作成した。

1. 新しい観測技術を得られると、これまでに見えなかったものが見え、宇宙観も変わる。つまり、天体望遠鏡の歴史は、天文観測による発見が人類の宇宙の描像を変えていった歴史と言い換えられる。
2. 宇宙を調べる道具である天体望遠鏡にも様々な種類（異なる波長、地上望遠鏡と宇宙望遠鏡など）があり、目的に応じて望遠鏡を使いわけると。特に最後の100年、望遠鏡の種類が多岐にわたり、しかも大型化する。

ポスターは、カード形式におさめた各望遠鏡の情報を、発展の流れをわかりやすく「すごろく風」に配置した年表部分と、「なぜこんなに多種類の望遠鏡が必要なのか」を理解するのに役立つ情報を並べたコラム欄からなる。本講演では、科学館や学校などでご説明いただく際のヒントや、世界天文年・日本委員会の主催企画とのタイアップについても紹介する。